いま伝えたい
――被爆者から
〈最終回〉

〈30〉 次の世代にバトンをつないで

岡山「被爆2世・3世の会」
岡村真沙子さん（54）

被爆の実相を

2015年10月、岡山「被爆2世・3世の会」が結成されました。私も準備から携わり活動しています。会の目的の一つに「被爆者の被爆体験や自らの被爆に関わる体験を継承することなどを通して被爆の実相を明らかにし、核兵器と戦争のない世界の実現を目指す」とあります。私はこの会にかかわり勉強する中で父の体験を継承する気持ちが強くなり、次世代にどんな世界を残すのか考えるようになりました。

私の父は13年前、71歳で亡くなりました。定年まで高校の教員として元気に過ごし、退職後は趣味の社交ダンスを楽しんでいましたが、検診で異常が見つかり白血病と診断されました。その18年前には、祖父も白血病で亡くなっています。

北朝鮮の核実験に抗議する宣伝で、岡村さん（昨年9月9日　写真提供　岡山原水協）

12歳で被爆した父

1945年、父は両親と妹の4人で、広島市牛田町に住んでいました。中学生だった12歳の8月6日、勤労奉仕で爆心地から1・5キロの鶴見橋あたりの「建物疎開」作業中に被爆。家まで帰ろうとはだしで歩いている途中動けなくなり意識を失い、3日後に行方不明の息子を探して爆心地付近を歩き回っていた祖父に助けられました。

父には右頬、手の甲、肩や足にやけどの跡があります。私が小学校の低学年のころ、「父の顔を描く」という授業があり、父の顔のどちら側にやけど跡があったか思い出せず、両頬を赤く塗ったことがありました。あとで母から、絵を見た父が「マコにはこんな顔に見えとるんか」と寂しそうに言っていたと聞き、胸が痛くなりました。朗らかに見えた父の心の奥の悲しみを感じました。

高校生に父の体験を

最近、「2世・3世の会」に、中学校、高校、看護学校などから親や祖父母の被爆体験を話してほしいとの依頼があり、高校生の前で話す機会がありました。

心がけたのは被爆時のことだけでなく、子どもだった父が、どんな生活をしていたかを具体的に思い浮かべてもらうことでした。父が5歳の時の七五三の写真が残っています。軍人だった叔父からプレゼントされた、子ども軍服セットの将校の軍服を着てサーベルをつけた姿に私は驚きました。サーベルも本物に近いものだったそうです。父の世代は生まれた時から戦争をしていて、男の子にとって「軍人」は憧れの職業だったこと。小、中学生も戦時体制を支えるための労働力として組み込まれ、夏休みなどなかったこと。食べ物や衣服、文房具も配給制でなかなか買えなかったことなど、戦争はある日突然始まったのではなく、日常生活から静かに準備されていたのだと気づいてほしい、と。

さらに活動を進め

昨年8月5日、広島市で初めて開催された「全国被爆2・3世交流と連帯の夕べ」に仕事で忙しい私に代わり、19歳の息子が参加しました。東京で大学生活を送っている息子は「岡山にいると平和学習で広島に行くし、身近な人から話を聞くこともあるけれど、東京で接する若者がヒロシマ、ナガサキのことをあまり知らなくて驚いた。平和資料館にある資料を出張展示するとか、もっと知らせる活動はできないか」と発言。交流した3世から刺激を受けて、息子も岡山の会のメンバーになりました。これからも次世代にバトンをつなぎながら、活動を進めていきます。